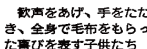
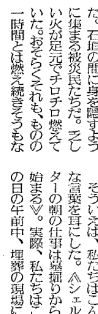
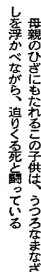


この現実を知ってほしいと祈りながら…



第二次アフリカ派遣団(同化した私は、エチオピア北部の干ばつ(シエラ・レオネ州の難民キャンプ「スモルタ」)を訪れた。顔えと寒さは予想以上にすさまじく、多くの被襲民たちは無表情のまま生死のさなまをさまよっていた。この現実を多くの日本人に知ってほしい」とひとすくす祈られた。写真は、私は「チャッター」を切り続けた。写真とルボで現地報告する。



は驚かした。これに反して、神は
慰められた。そして、
胸の中には比較的古な子供
が大切に抱かれた。
その子が「母親の唯一」の希
望であらうに思えた。

夢に醒めるまでは、聖を煩
む。髪を洗ふのは、純い孩
き)が絶えず聞くと、

視察するべきであった。

中ではカルター(露民ギョウ
ン)に向かう途中、小五郎と
盛りの頭で、三人の男学生
押していた。シュルターで
きた。また回教徒たちの聲だ
た。

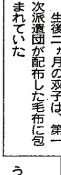
☆ あまりにも
少ない毛布 ☆

RRC (エチオピア共和国)

「シェルター」房と、セント街にない人々が、朝もやのなかで食卓の準備をした。卵をとったのを焼いた。食卓に配給された小麦粉を練ったパンと、コビー。あるいは麦を煮たおかわり状にしたものだった。

男房には炊飯器もあり、大きな六で子供用のミルクを沸かすシェルター内の給湯センターは全員の食事が助けていた。

「シェルター」では、各国の



「おいしいながらも、野外では学校教育も行われていた。子供供たちの表情は明るく、その服は綺麗にいた。」

給食センターに行ったら、百人以上の子供たちが、カメラのストロボが光るたびに「オー」と両手を上げて、うなづく。そんな目をギョギョさせて、飛びつくように握手

うに
受け取っ



私たちが、諸國から運られてきた毛布を布した時のことである。山から降りるなり、出まて来た人たちの中から「オロロロ」とうように、喜びの音が一面に響いた。

一枚一枚毛布を配ると、幼児を持つ母親はむよむよとして受け取った。まるで御を余るやうにきくし、喜びを全身で表す人もいた。毛布を手にした子供たちは「ハッピ、ハッピ、ベリー・

メケレの上空を舞う千匹の毛布がメケレに到着した。近日常に六、七千枚の毛布がメケレに到着する可能性が少なくなってきた。私はたゞメケレが北に百マイル離れたアクスムまでドワに飛んだ。

☆ この子供たち ☆
☆ ちに平和を ☆

メケレの大地が見望し得ないほど広がっていた。北緯三州(台)オ州、テイクレ州、エリト

郡移住したため、追まっていた。何十もの道筋のりを歩き、体力を消耗し切った男たちは、炎天下にさらされ、何かがかの場にバタバタ倒れた。

メケベ、アクスムに捕仕した十日間、私たちは、各シエルケで間断なく機り縫される生地の工場に遭遇した。

生来は毛ばかりの赤ちゃんとやんやの赤ちゃんと、第一次派遣が配布に日本の毛布をばらまいてから後は、今

